

AP/FD NEWS LETTER

横浜国立大学

高大接続・全学教育推進センター

2018.10
Vol.10

CONTENTS

- P1 : 大学での学びについて
高大接続・全学教育推進センター センター長 上ノ山 周
- P2-7 : 「授業設計と成績評価ガイドライン」の活用状況に関する
教員アンケートの結果報告
高大接続・全学教育推進センター 安野 舞子
- P8-11 : 学修成果の可視化①
学生プロフィールによる学修成果の測定が始まる
大学院教育強化推進センター/高大接続・全学教育推進センター 市村 光之
- P12 : CENTER NEWS
4大学FDフォーラム開催のお知らせ
高大接続・全学教育推進センター 副センター長 松本 真哉



大学での学びについて

高大接続・全学教育推進センター センター長 上ノ山 周

最高学府に身を置くものとして、教職員であれ、学生であれ、「大学での学び」については、常日頃からとは言わないまでも、折に触れて思い巡らすべきことでしょう。中高までの学びや専門学校での学びとは、何かはずと違っているはずですが、今から40年も前のこととなりますが、私が大学生時代、実験・演習・実習を除いて、いわゆる座学は、一方的に教授が、文字通り教え授けるものでした。90分の授業で黒板を7回も消される「量子統計力学」という科目があり、それも強烈に細かな数式の羅列でした。授業時間中には、一切理解不能でしたが、大学の講義とは、もの凄いものだと思える感動を覚えたことを鮮明に思い出します。最先端の研究を担っている者であるからこそできることでしょう。その先生は、後日ノーベル化学賞を受賞されました。一方、現在の理工学部的前身である横浜高等工業学校の初代校長鈴木（煙洲）達治先生は、「無試験・無採点・無賞罰」の三無主義を提唱・実践されました。採点と評価の厳格化を主導するJABEE(日本技術者教育認定機構)が聞けば目を剥いて驚いたことでしょう。本学キャンパスの理工学部エリアに建つ、煙洲先生が揮毫された「名教自然(名教は自ずから然り)」の碑は、登録有形文化財ですが、「自学自習」の精神に基づく万里清風、自由闊達な全人教育がその根底に在ったと聞きます。少人数を対象とした旧制高校時代の全人教育は、理想形に近いようにも思えます。ただ今では、どちらもなかなか許されないことでしょう。ではどのようにすれば良いのか? 一方的な教授ではなく双方向的な

参画型の授業、今流の言葉では、Active Learningが、解答を得る一つの鍵でしょう。座学においてもプレゼンテーションやディスカッション、ディベートなどをもっと積極的に取り入れて行くことが求められていると考えます。とくに、ある一つのテーマの賛否を巡り、ルールに則って、相手を客観的に論破・説得することを競い合うディベートは、欧米では、初等教育の段階から導入されていると聞きます。日本の教育に決定的に欠落していることではないでしょうか?

本学では、英語に堪能な留学生の助力を得ての自立英語や、教員の自発的な提案に基づくYNUリーディング・レクチャー・シリーズ科目もこの春学期から始動しました。どちらも現学長長谷部勇一先生のご発案・ご発議によるものです。Activeな全学教育の新たな試みですが、これから太く根付いて行くよう、尽瘁して参りたいと考えます。

啐啄同時(そったくどうじ)という禅の教えを表す言葉があります。啐は雛が中から殻をつつくこと。それにシンクロさせて親鳥が外からついばむことで殻が壊れ、雛が誕生する。師家(しけ)から弟子へ奥儀が伝授されるさいの心構えを説いたものですが、双方向教育の要諦がそこにあるように思えてなりません。折しも今年のヨコハマ4大学FDフォーラムでは、Active Learningがテーマとして設定されています。それぞれが智慧と工夫を持ち寄り、よりグレードアップされた学びの姿が提示・提案されますことを願って止みません。

最後に問います。皆さんにとって大学での学びとは、何でしょう?

「授業設計と成績評価のガイドライン」 の活用に関する教員アンケート結果報告

高大接続・全学教育推進センター 安野 舞子

はじめに

本学では、毎学期の授業アンケート実施後に、アンケート結果を次の授業の改善・向上に活かしていただくことを目的として、科目担当教員に「自己点検票」を作成いただいています。平成28年度秋学期作成分からは、全学的なFD活動に資する情報を得ることを目的に、「自己点検票」作成フォーマットで簡単なアンケートを実施しています。平成29年度秋学期に関しては、過去2期分連続で行ってきた「各種授業手法の活用状況についてのアンケート」と合わせて、『授業設計と成績評価ガイドライン』の活用状況に関するアンケートを実施しました。本稿では、後者のアンケート結果についてご報告いたします。

教員アンケートの趣旨と質問内容

本学では、平成27年度に「授業設計と成績評価ガイドライン」を策定し、全学統一の「成績評価基準」と「授業別ルーブリック」を導入しました。このガイドラインは、授業内容や成績評価の基準などについて学生と教員が認識の共有を図り、学修効果を高めることをねらいとしています*。そこで今回の教員アンケートでは、このガイドラインの活用状況について4つの観点から尋ねてみました。質問内容とその回答の選択肢は次の通りです。なお、今回のアンケートへの回答科目数は508でした。(平成29年度秋学期の授業アンケート実施科目数は885)

<p>Q1. 授業の初期段階で、成績評価の方法（到達目標や履修目標の説明を含む）や配点を学生に説明しましたか。</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 説明していない 2. 簡単に説明した：シラバスを参照するよう話すなど、軽く言及する程度 3. 十分に説明した：授業内で到達目標や履修目標の各項目や配点を説明する等
<p>Q2. 授業の初期段階で、成績評価基準（ルーブリック）を学生に説明しましたか。</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 説明していない（ルーブリックを作成していない） 2. 説明していない（ルーブリックをシラバスに掲載している） 3. 軽く説明した：シラバスを参照するよう話すなど、軽く言及する程度 4. 十分に説明した：授業内でルーブリックの各項目等を説明する等
<p>Q3. 成績評価の際に、ルーブリックを活用しましたか。</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. まったく活用しなかった 2. 参考に見る程度だった 3. レポートや授業参加態度など、一部の評価で活用した 4. ほぼルーブリックに則って評価した
<p>Q4. 授業アンケートに表われた授業外学修時間は、シラバスの「授業時間外の学修内容」に示した事前・事後学修の時間、課題の量などと合致していましたか。</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. シラバスに事前・事後学修の時間、課題の量などは明記していない 2. シラバスに示した時間より少なかった 3. シラバスに示した時間とほぼ同じだった 4. シラバスに示した時間より多かった

アンケート結果

1) 成績評価の方法や配点についての説明

Q1 では、授業の初期段階（基本的には第1回目のオリエンテーション時）において、到達目標・履修目標も含め、成績評価の方法やその配点について学生に説明したかを尋ねました。図1はその結果を全体および開講部局別にまとめたものです。

成績評価の方法等について、授業の初期段階で十分に説明している科目は全体の3割程度で、説明していない科目が1割以上存在していました。開講部局別にみると、学部教育科目においてあまり十分な説明がなされていない傾向がみられます（ただし、経済学部を除く）。履修目標や到達目標、また成績評価の方法やその配点について説明することは、学生が当該授業でどのようなことを学び、成績はどのような水準と方法で評価されるのかを知ることで自発的な学修が促されることが期待できるため、科目担当教員は、授業の初期段階でこれらのことについてきちんと説明することが大切と考えます。

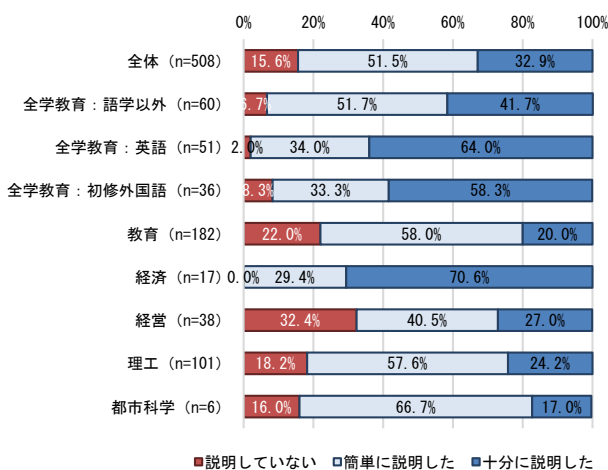


図1 Q1. 成績評価の方法や配点等の説明の程度

2) 授業別ルーブリック（成績評価基準表）の説明

本学では、平成28年度開講科目より、電子シラバス上で「授業別ルーブリック」の作成が始まりました。授業別ルーブリックを作成する目的は、授業の「評価項目」（＝履修目標）とその「評価基準」を明示し、担当教員・学生間で授業内容と成績評価に関する認識を共通化するため

です。そこでQ2では、授業の初期段階で、授業別ルーブリックを学生に説明したかを尋ねました。図2はその結果を全体および開講部局別にまとめたものです。

全体的に、授業別ルーブリックは作成したもの、授業の初期段階で説明していない科目は4割近くにのぼり、次いで多かったのがルーブリックを作成していない科目でした（29%）。よって、回答科目の7割近くが授業別ルーブリックについて授業で説明していない、という結果でした。一方、授業別ルーブリックについて説明している3割程度の科目のうち、「軽く説明した」の場合は「シラバスを参照するよう話すなど、軽く言及する程度」です。よって、授業別ルーブリックについてきちんと説明がなされている科目はかなり少ない状況です（アンケート回答科目の6.3%）。なお、ルーブリックについて十分説明している科目が比較的多いのは経済学部、および語学系の全学教育科目でした。授業別ルーブリックの作成目的が「担当教員・学生間で授業内容と成績評価に関する認識を共通化するため」であり、それは「学生の主体的な学びの促進」を目指していることを踏まえると、Q1の「成績評価の方法や配点等の説明」と同様、授業の初期段階で授業別ルーブリックについて説明がなされることは大切であると考えます。

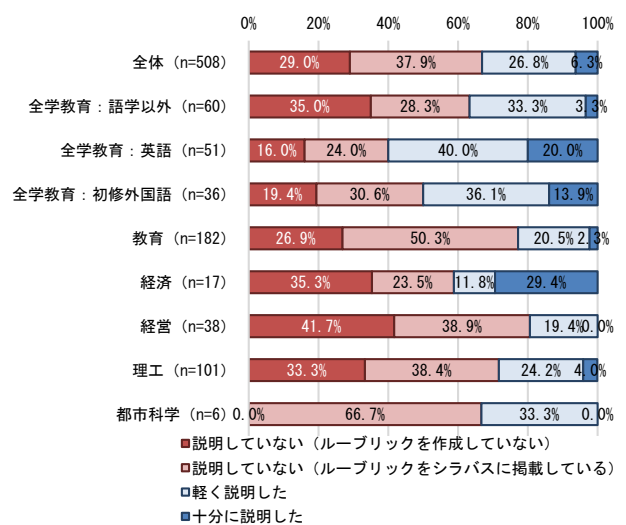


図2 Q.2授業別ルーブリックの説明の程度

3) 授業別ルーブリックの活用

Q3 では、成績評価の時に授業別ルーブリックを活用したかを尋ねました。図3が示すように、全体的に、授業別ルーブリックを活用した3種類の群の中でも、「参考に見る程度だった」の割合が最も多く(37.1%)、「ほぼルーブリックに則って評価した」科目は1割程度でした。

Q2 の回答結果と照らし合わせてみると、授業別ルーブリックは作成したものの、成績評価の際にはまったく活用しなかった科目がある程度あることが窺えます。この「授業別ルーブリックは作成したものの、まったく、もしくはほとんど活用されていない科目がある」という点は今後の課題です。授業別ルーブリックは本学で導入したばかりということもあり、「どのように活用してよいのか分からない」という先生方もおられるかと思いますが、今回のこの結果を受け、「授業別ルーブリックを作成したものの活用していない」理由について今後聞き取り調査を行い、原因の究明と解決策の提案を行なっていきたいと思います。

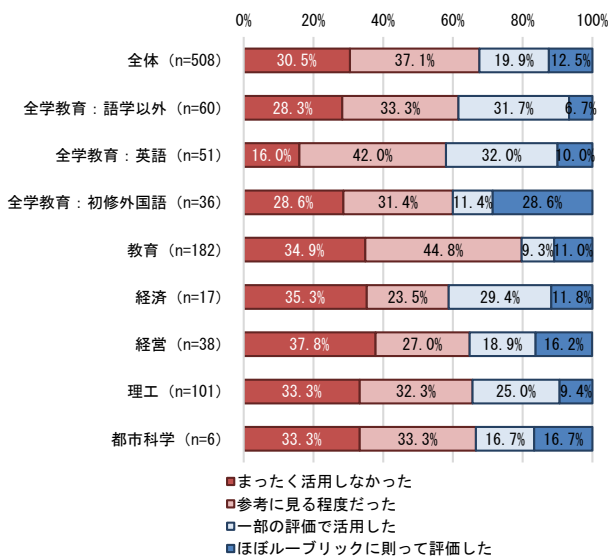


図3 Q3. 授業別ルーブリックの活用

4) 授業外学修時間の量について

「授業設計と成績評価ガイドライン」の導入に合わせ、平成28年度開講科目より授業時間外に学修すべき内容を電子シラバス上に明示することになっています。そこで、Q4では、授業アンケート結果に表われた授業外学修時間が、シラバスの「授業時間外の学修内容」に示した事前・事後学修の時間、課題の量などと合致していたかを尋ねました。図4が示すように、全体的に、シラバスに事前・事

後学修の時間や課題の量などを明記していない科目が4割以上であり、明記している場合、授業外学修時間はシラバスに示した時間とほぼ同じであった科目の割合が最も多い(32.5%)という結果でした。シラバスに示した時間よりも授業外学修時間が多かった科目は2%未満でしたが、開講部局別にみると理工学部と教育学部の科目においてそうした科目がある程度あったことが窺えます。授業アンケート結果で学修成果項目(理解度、知識・能力の獲得、興味・関心、満足度)を見る時には、授業外学修時間と照らし合わせて確認される先生方が多いと思いますが、その時に、シラバスにどのように事前・事後学修の時間や課題量等を明記していたか、実際の授業ではどれだけ実践できていたか、その明記した内容は妥当だったか等を振り返ることも重要と考えます。シラバスに授業時間外の学修内容を明記することは、学生に対して授業時間外学修の必要性・重要性を訴えるメッセージにもなるため、今後、シラバスへの明記を徹底していく必要があると考えます。

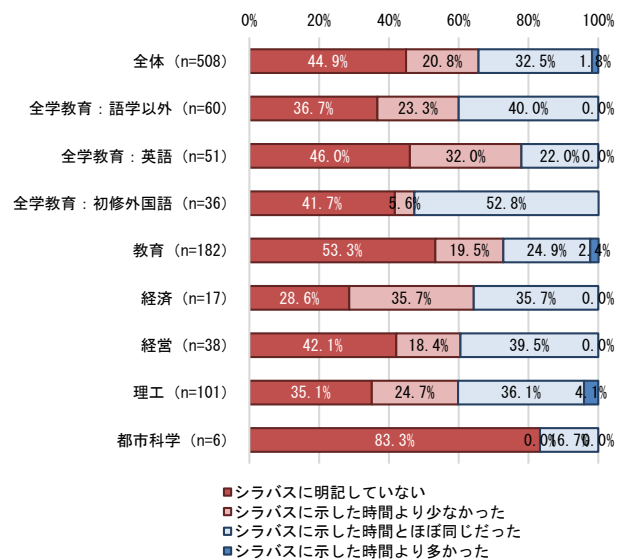


図4 Q4. 授業外学修時間の量

おわりに

今回の教員アンケートでは、「授業設計と成績評価ガイドライン」が導入されて以来はじめて、その活用に関する実態調査を行いました。同ガイドラインが平成27年度に導入され、そのガイドラインに沿う形で電子シラバスが改修され入力開始されたのは平成28年度ですから、今はまだ定着に向けた過渡期であると考えます。今回のアン

ケート結果では、授業別ルーブリックが作成されていない科目や、作成されていても説明を含め、その活用が十分に
なされていない科目、授業時間外の学修内容について明記
されていない科目が比較的多いことが分かりましたので、

その原因や理由について丁寧に確認し、ガイドラインの定
着に向けた取り組みを、今後、高大接続・全学教育推進セ
ンターとして行って参りたいと思います。

* 「授業設計と成績評価ガイドライン」の全文は以下の通りです。

授業設計と成績評価ガイドライン

本学における教育の質の保証と向上を目指して、このガイドラインは設定されました。ルーブリックを用いて、教員および学生の成績評価に対する認識を統一し、各授業における目標と成績評価の関係を明示します。ガイドラインに従った授業設計と成績評価を行うことで、学生の主体的な学びが促進され、優秀な学生が成長することを期待しています。

(授業改善の PDCA サイクル)

I. 授業設計の時に授業の目標ならびに授業時間外の学修内容を設定し、シラバスに記述して下さい。授業を実施し、設計時に定めた目標に従った成績評価を行って下さい。その結果として成績分布に偏りが出たら、次年度の授業に向けて改善を行って下さい。図1のPDCAサイクルを繰り返すことで質の高い授業へと改善して下さい。

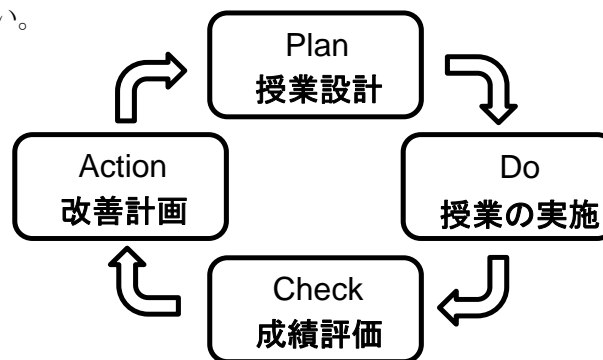


図1 授業改善のPDCAサイクル

(成績評価の基準の統一)

II. 授業で扱う内容(授業のねらい)を示す目標を「履修目標」とし、ほぼ達成していれば成績評価は「優」以上として下さい。授業において最低限学生が身につける内容を示す目標を「到達目標」とし、達成していれば成績評価は「可」以上として下さい。成績評価の基準表として表1を用います。学生向けに表2の各目標の説明文を公開します。

表1 成績評価の基準表

秀	優	良	可	不可
履修目標を越えたレベルを達成している	履修目標をほぼ達成している	履修目標と到達目標の間にあるレベルを達成している	到達目標を達成している	到達目標を達成できていない

履修目標：授業で扱う内容（授業のねらい）を示す目標

到達目標：授業において最低限学生が身につける内容を示す目標

表2 履修目標と到達目標（学生向け）

履修目標	授業で扱う内容（授業のねらい）を示す目標です。より高度な内容は自主的な学修で身につけることを必要としています。
到達目標	授業を履修した人が最低限身につける内容を示す目標です。履修目標を達成するには、さらなる学修を必要としている段階です。

（授業別ルーブリック）

Ⅲ. 授業別ルーブリックとは表3に示す表です。どのような観点で成績評価を行うかという「評価項目」とそれぞれの評価項目に対する到達度を表わす「評価基準」を表形式で示しています。授業別ルーブリックを学期前に明示して、授業別ルーブリックに従って成績評価を行って下さい。学生向けに表4の説明文を公開します。

表3 授業別ルーブリック

	評価基準				
	期待している以上である	十分に満足できる(履修目標)	やや努力を要する	努力を要する(到達目標)	相当の努力を要する
評価項目 A		履修目標		到達目標	
評価項目 B					
評価項目 C					

表4 評価基準の説明（学生向け）

評価基準	内 容
期待している 以上である	授業の範囲を越える内容までを自主的な学修で修得していることが認められます。
十分に満足できる	履修目標の水準をほぼ修得しています。授業の内容をほぼ修得したことが認められます。
やや努力を要する	履修目標と到達目標の中間に位置しており、努力することを勧めます。
努力を要する	到達目標の水準をほぼ修得していますが、まだ努力が必要です。
相当の努力を要する	到達目標に達していません。授業のねらいの水準に達するには相当の学修が必要です。

（教員間協議の励行）

IV. 同一科目の複数クラスを複数教員でそれぞれ担当する科目や一つの科目を複数の教員で担当するオムニバス形式科目は、担当教員の協議により授業の目標と成績評価の基準を設定して下さい。

（科目による柔軟性）

V. 能力別編成クラスの科目や受講生が少人数の科目は、担当教員の判断により、当ガイドラインを柔軟に適用して下さい。

以上

学修成果の可視化①

学生プロフィールによる学修成果の測定が始まる

大学院教育強化推進センター/高大接続・全学教育推進センター 市村 光之

高大接続・全学教育推進センターでは、H29年度秋学期より YNU 学生ポートフォリオに《学生プロフィール》を導入しました。学生にとっては主体的な学びをデザインするツールであり、大学にとっては学生の学修行動や成果を分析し、教育改善に結びつけるツールです。今回は学生プロフィールの概要と、分析結果の一部を紹介させていただきます。

学生プロフィールの仕組みは

学生プロフィールは、学生が自身の学修・生活行動や学修成果を記録するものです。毎学期、履修登録の段階で学生プロフィールの入力を済ませてから、履修登録画面に進むステップにしています。これにより悉皆調査が可能になりました。

春学期の履修登録時の入力項目：

- 高校時代の学修・生活行動（新入生のみ）
- 学士力自己チェック（2年生以上）
- 前年度の留学等の授業外活動（2年生以上）

秋学期の履修登録時の入力項目：

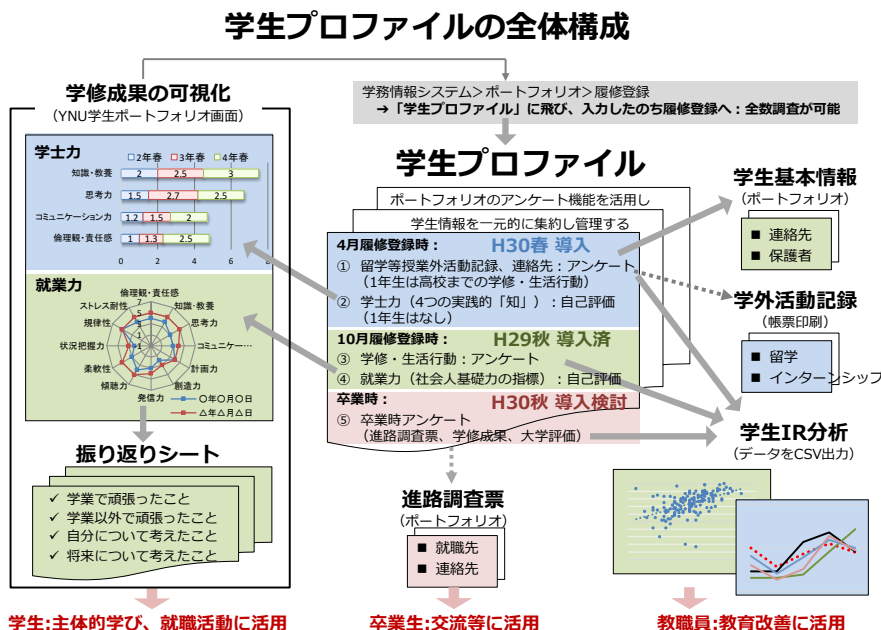
- 前学期の学修・生活行動や意識（全学年）
- 就業力自己チェック（全学年）

学生は自分の学士力や就業力などをグラフに可視化して確認できます。それら学修成果を踏まえ「振り返りシート」に前学期の記録をまとめ、新学期の履修科目や学生生活を構想する仕組みです。

毎学期、履修登録の段階で学生プロフィールの入力を済ませないと履修登録画面に進めません。このような形で学生に入力を強制することが妥当なのか、学生は主体的に学べるようになるのか、と疑問を感じる方もいらっしゃるかと思います。導入担当者として筆者にも不安がないわけではありませんが、「就活の時期になって初めて、定期的にポートフォリオに記録しておけばよかった」と後悔する学生の声も耳にします。学生が大学で学ぶ目的や方向性を考えるきっかけとして半年毎に振り返りを促すのも、学生が主体的な学びの姿勢を獲得する一助になると判断し導入に踏み切りました。

導入したからには、入力しないと履修登録ができないから入力する、ではなく、役に立つから入力すると学生が自発的に利用するよう、今後もよりよい仕組みにしていきたいと思います。

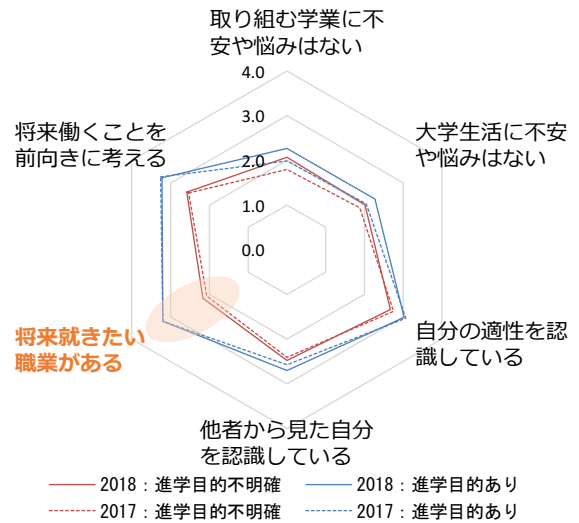
いずれにしても、この方式により学修成果等を定期的に悉皆調査できるようになりました。学生に入力の負担を強いる分、主管する高大センター側も学生 IR データとして迅速に集計・分析し、各部局が教育改善に活かせるよう情報展開していく所存です。



学業と将来の係りの意識付けが主体的な学びにつながる

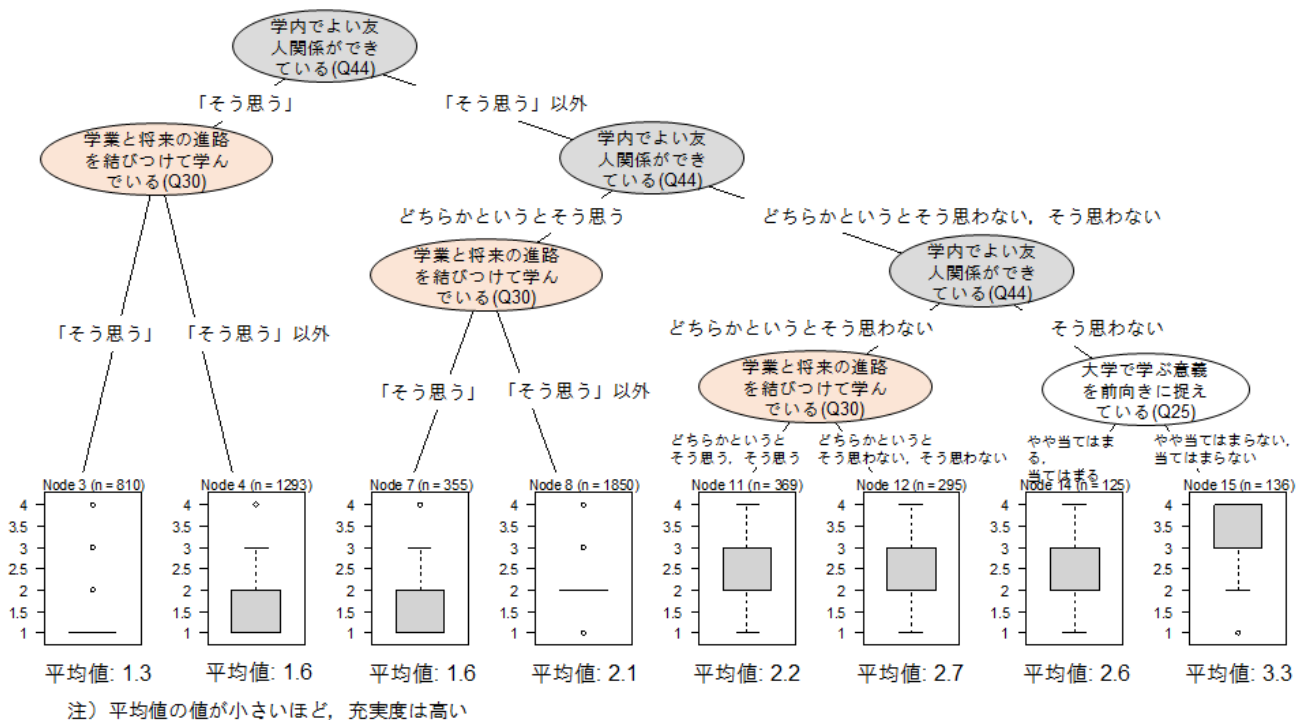
右図はH29、30年度新入生の意識調査で、横浜国大に進学した目的が明確にある人とない人に分けて、入学時の意識を4件法で集計したものの平均値です。6項目のうち多くは僅差ですが、「⑤将来向かいたい進路、就きたい職業がある」で差が目立ちます。新入生たちは、大学で学ぶ目的と将来の進路をつなげて考えていると推測できます。この傾向は同調査を開始した5年前から変わりません。そこで、将来の進路との関連で学業の意義を認識できれば、学生たちは主体的な学びを実現できるのではないかと仮説に基づきキャリア教育科目を再体系化し、H29年度より開始されたYNUリテラシー教育の共通テキストに反映してきました。

学生プロフィールの導入に伴い、学生の学修・生活行動や意識を継続的に測定できるようになりました。下図は、H29年秋学期に実施した上級生(2~4年)の調査結果を「大学生生活の充実度」を基準変数に決定木分析したものです¹⁾。第一に、「学内でよい友人関係ができています」ことが大学生生活の充実度に寄与しています。学生たちにとって人間関係が何より大切であることがわかりますが、これは社会に出てからの仕事の充実度



でも、取り組む業務そのものの遣り甲斐と共に、重要な要素でしょう。

注目すべきは第二のファクターで、「学業と将来の進路を結びつけて学んでいる」ことが挙がりました。つまり、学生たちは将来との係わりの中で自分が大学で学ぶ意義を見出し、そうした意義から目的意識をもち専攻する学業に取り組むことで充実を感じているのです。新入生の調査で乖離が見られた将来との係わりの部分をいかに繋ぐか、がやはり重要であることが、今回確認できたこととなります。



新生の調査では横浜国大の志望度と、本学に入学することを前向きに捉えているかどうかも訊いています。H30年度では、前期入試組うち273名(前期の29.2%)は第一希望ではなく、前期・第一希望であるにも拘らず114名(17.2%)が前向きになれないまま入学式を迎えています。後期入試組は第一希望でない学生が大半ですが、前向きになれない学生は72名(後期の14.9%)と前期組よりは少ない割合です。

前期組で前向きになれない学生の主な理由は、学業についていけるか不安:21.4%、居場所(友人、部活等)が作れるか不安:20.6%、大学で特にしたいことがない:16.8%など。大学という新しい環境への適応不安と、大学合格がゴールで次の目標が見いだせないことにあるようです。

後期組で前向きになれない学生の主な理由は、第一希望に入れなかった悔しさ:35.0%、来年、再受験しようかと思案している:15.0%、自分の将来にどう結びつくか不安:12.0%です。不本意ながら入学した現状をまず受け止め、早期に新たな目標を設定することが課題です。その解決の糸口の少なくとも一つは、学業と将来との係わりを自覚させ、これから始まる大学生活の意義をいかに見出させるかにありそうです。

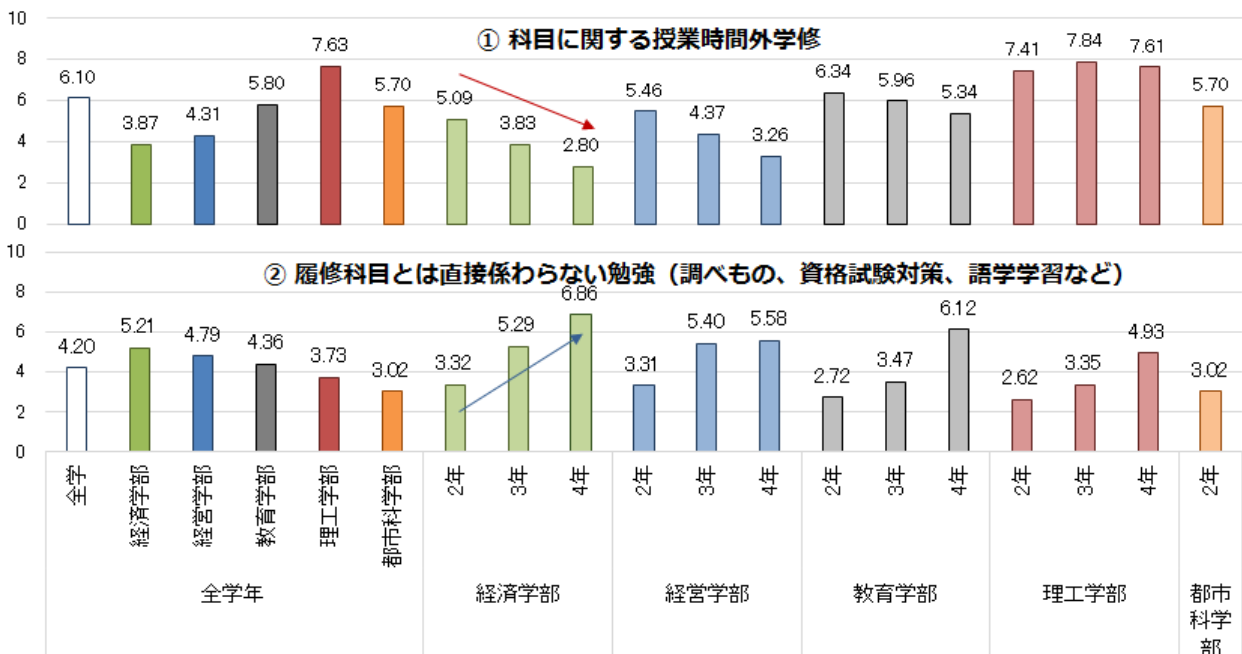
これら前向きになれない新生に主体的な学びの姿勢を身に着けさせるためにも、1年次春学期という入り口の段階で、履修登録をはじめ大学というシステムや新しい人間関係に適応させ、それぞれの専攻で学ぶ

ことと将来の係りを意識させることが大切です。初年次教育が目指すところは、各大学の実情によりさまざまかもしれませんが、本学が目指す初年次教育はここにあります。これはYNUリテラシー教育やキャリア教育に留まらず、各教員がそれぞれの立場で、全学的に取り組む課題と言えるのではないのでしょうか。

学修時間から見えること： 授業外学修と科目以外の自主勉強

学生たちは日々の時間を何にどのくらい費やしているのでしょうか。学生プロフィールでは、学生の学修・生活時間の実態を把握する試みとして、週当たりの学修やサークル活動、アルバイト、通学などの時間を学生に書かせています。「試み」と書いたのは、前学期を振り返って平均的な週当たり時間を記入させているので、かなり感覚的な数字でしかなく、どこまで実態を正確に反映しているかはわからないからです。そうした制約があるデータであることを前提にしつつ、見えてきたいくつかの特徴について説明します。

下図は、①授業外学修時間と、②科目とは直接係わらない勉強の週当たり時間の平均です。両グラフの左側が学部別の平均、中央から右が学部・学年ごとの平均です。このデータはH29年秋学期を振り返った際の数字ですので、「4年」は3年時の秋学期、「3年」は2年時の秋学期と読み替えてください。



①授業外学修時間の学部別（左側）を見ると、経済・経営・教育学部よりも理工学部の学修時間が多いです²。学部・学年ごとを見ると、理工は学年が上がっても学修時間はほぼ同じですが、文系学部では学年が上がるごとに学修時間は減る傾向にあります。理工系は学年が上がっても必修科目等で時間割が埋まっていますが、文系は学年が上がるにつれ履修科目が減る傾向にありますので、授業科目に係る学修時間も履修科目数に比例しています。文系は理系に比べ勉強しない、と一般に言われる所以です。一方、②科目とは直接係わらない自主勉強時間では、①の傾向は逆転し、学部別では理系よりも文系学部が多くなります。学年別では、文系学部も学年進行とともに自主勉強時間が増えます。

この①②の時間を合算したのが下表です。学部ごと、学年ごとの差、共に1~2時間と意外に小さく、週当たりの勉強時間は学部、学年に拘わらず10時間前後になることが分かります。つまり、世間で言われているように、文系は理系に比べ勉強しないというイメージは、少なくとも横浜国大の学生に関しては該当しません。学修時間が多ければよいと単純には言えませんが、海外に比べ日本の大学生は勉強しないと一般論として認識されている中、この10時間前後が大学生に相応しい学修時間なのかどうかは、今後の分析課題です。

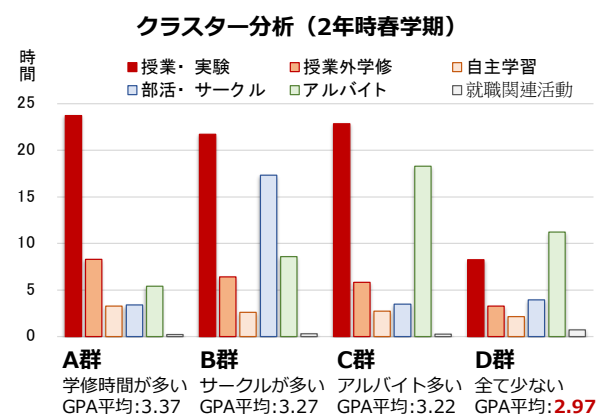
授業外学修+授業と係わらない勉強時間

	経済	経営	教育	理工
2年	8.41	8.77	9.06	10.03
3年	9.12	9.72	9.43	11.19
4年	9.66	8.84	11.46	12.54

4年（3年秋学期）のみ文系と理系学部の差が大きくなっています。3年の秋学期は就職活動の準備期間に当たり、文系学部の学生は就活に時間を振り向けているためです。実際、3年時秋学期の就活関連の週当たり時間は、経済・経営学部が8.5時間、教育が5.5時間、理工が2.2時間でした。約半数が教員採用試験を目指す教育学部、大学院進学希望者が大半の理工学部との事情の違いが表れています。理工の学部平均は2.2時間ですが、理工で就職する学生は2割ほどですので、そこから推測すると就職希望の学生は文系同様8時間くらい活動していると推測できます。このように文系・理系に拘わらず就活に係る負担が大きい現状も、今回の調査で初めて数値化できました。

時間の使いかたから見えること： 4タイプの学生たち

学生の生活時間についてクラスター分析したところ、1~3年生は授業や授業外学修、自主学習など学業に多くの時間を費やしているA群、学業とサークルなど課外活動に熱心なB群、学業とアルバイトに熱心なC群、いずれも不活発なD群の4タイプに分かれることがわかりました³。2年生のデータを下図に示します。



学業を全うすることが前提ですが、学生生活において何に重きを置くかは、学生それぞれの判断に委ねられます。A~C群の学生たちは学業に費やす時間がほぼ同じです。その中でB、C群は、学業に加え重点的に取り組む活動があって、それらをうまく両立させているように見受けられます。A群は学業オンリーなのが少し気になります。高校時代はいわゆる「帰宅部」タイプ、真面目に大学に通っていますが目的意識が希薄な学生たちなのでしょうか。さらに、D群の学生（学年の約2割）は授業時間から推察すると大学にあまり登校しておらず、生活実態が不明です。GPAの平均値も他の3群に比べ明らかに差があります。こうした学生を早期に把握し、事情を勘案しつつ個別にサポートすることが必要でしょう。

学生プロフィールの導入に伴い、学修成果の測定に留まらず、こうした情報提供をタイムリーにできる仕組みも今後、整えていきたいと考えています。

注1、3：決定木分析とクラスター分析は、教育学部・鈴木雅之准教授の協力による。

注2：H29年（現2年生の入学時）の学部新設・改組により、教育人間科学部は教育学部に改組、理工学部および教育人間科学部の一部を再編し都市科学部が新設された。なお、本稿では旧学部も新学部名で表記している。

CENTER NEWS

4大学FDフォーラム開催のお知らせ

高大接続・全学教育推進センター 副センター長 松本 真哉

本学は、平成 27 年度に神奈川大学及び関東学院大学と FD 活動の連携に関する包括協定を締結し、各大学のリソースを活用しながら FD 活動の推進に取り組んでいます。この協定に平成 28 年度から横浜市立大学も参加し、現在はこれらの四つの大学が連携し FD に関わる活動を進める体制になっています。昨年度は本学が幹事校となり、2017 年 12 月 10 日(日)に「学生調査の現状と課題 - 学生の声の声を基に調査結果の活用について考える-」と題して、学生が参加するパネル討論を中心としたフォーラムを本学で開催し盛況を得ました。このフォーラムでは、授業アンケートなどに対する学生の生々しい意見が示され、教育関係者との議論などから、今後の学生調査に関する貴重な知見を得ることができました。今年度は横浜市立大学が幹事校となり、最近、教育界で注目が集まっているアクティブラーニング(AL)に関する内容を軸としたフォーラムの開催に向けて協議が進められています。具体的な内容はまだ協議中ですが、各大学

で実施されている AL の事例や受講した学生の意見などを共有し、AL の活用について本音で語り合う場になることを目指して議論が進められています。今年度のフォーラムは、土曜日の開催になりますが、12 月 8 日(土)に横浜市立大学で開催する予定です。本学でも AL の実施率の向上を目指した取り組みが検討されています。是非とも多くの教員の皆様にお越し頂き、議論に参加して頂ければ幸いです。



4大学FDフォーラムに向けての打ち合わせの様子



昨年の4大学FDフォーラムの様子

Schedule (高大センターからのお知らせ)

- 平成 30 年 11 月 19 日 第 4 ターム授業アンケート開始
- 平成 30 年 11 月 26 日～30 日 第 4 ターム試験期間
- 平成 30 年 12 月 8 日 ヨコハマ 4 大学 FD フォーラム
- 平成 31 年 1 月 21 日 第 5 ターム/秋学期
授業アンケート開始
- 平成 31 年 2 月 4 日～12 日 第 5 ターム/秋学期試験期間
- 平成 31 年 3 月 26 日 卒業式

横浜国立大学 AP/FDニュースレター 第10号 (通号36号)

発行：平成30年(2018)年10月 編集・制作：高大接続・全学教育推進センター

Email：yec.center@ynu.ac.jp

ホームページ：www.yap.ynu.ac.jp (AP特設ページ) www.yec.ynu.ac.jp (高大接続・全学教育推進センター)